

ひびく句・ひらく句

十一月の秀句

龍野 龍

小春日やスマホにものを尋ねをる 山田真砂年

小春日に相應しい穏やかな光景であるのだが、それだけでは済まないような気がする。「スマホでものを調べる」のではなく、「スマホにものを尋ねる」光景を提示しているのだ。スマホがAI（人工知能）を得ることによって、AI自身で考え、相手が求めるものを創り出すようになった時代である。例えば、手紙や挨拶文を書くという人間にしか出来なかった知的作業ができるのがAIである。「スマホにものを尋ねをる」の表現から考えれば、作者もまたスマホの中の仮想人格を意識しているようだ。AIは、最も身近な最先端の技術と言えよう。

しかし、このAI技術の進歩がもたらすメリットとデメリットは、昔から多くの議論があった。筆者も、このAIの進歩によって人間にしか出来ない分野がどんどん減らされていく危機感を感じている一人である。作者もその一人だからこそ、掲句があるのだ。奥に秘めた危険性を感じさせる最先端のAI技術、スマホに向かって尋ねながら便利になったものだと感心している人々、その多くの人はこの先どうなるのかと、一抹の不安も感じてはいないだろうか。思えば「小春日」も、ぽかぽか陽気の平和な日常に酔いしれる時なのだが、実は寒さが迫っている季節である。寒気が迫っている中で現れた穏やかな一日は、スマホにものを尋ねている長閑な光景と重なっているような気がしてならない。現代社会を見つめた深い一句である。